

# シリーズ白眉対談⑫ 司会・編集：ニューズレター編集部

## 「モノを通して過去を読む」

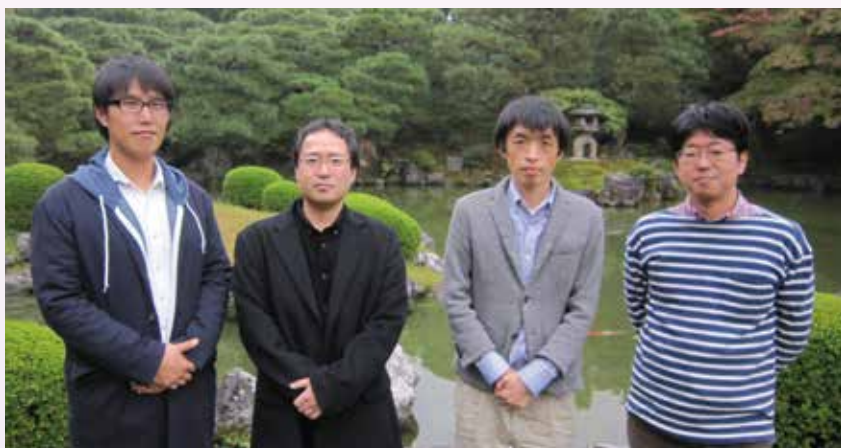
### 登場人物と研究課題

**武内 康則** 特定助教『契丹学の構築：契丹の言語・歴史・文化の新しい研究パラダイム』

**荻原 裕敏** 特定准教授『中央アジア地域における弥勒信仰の受容とその展開』

**岩尾 一史** 特定准教授『7-13世紀の東部ユーラシアにおける国際秩序と外交』

**金 宇大** 特定助教『古墳時代における朝鮮半島交渉の実態解明と社会発展過程の再構築』



左から金氏、荻原氏、武内氏、岩尾氏

### 自己紹介

(司会) 今日は一ときわ地味な(笑) 研究をしている皆さんに語り合っていたたく予定です。まずは自己紹介からお願いいたします。

(武内) 5期の武内康則です。専門分野で言うと歴史言語学になります。特に北中国で10世紀から12世紀頃に使用されていた契丹文字の研究をしています。

(荻原) 6期の荻原裕敏と申します。私の専門は、同じく歴史言語学です。現在の新疆ウイグル自治区のクチャを中心に、5世紀から11世紀頃まで使用されていた、印欧語族のトカラ語という言語を文献学的に研究しています。

(岩尾) 7期の岩尾一史です。専門は歴史学ですね。いわゆる敦煌文書などの出土文書を使って、特にチベットの歴史をやっています。

(金) 7期の金宇大です。専門は考古学で、古墳時代の日韓交流を、主にお墓から出土する副葬品の分析を通じて研究しています。

### モノと研究とのかかわり

(司会) ありがとうございます。では次に、皆さんが扱っているモノと、研究とのかかわりについて、お願いいたします。

(岩尾) 僕らの分野は、テキストを読むだけではなくて、モノの「手ざわり」というのが重要で、極端に言えば、偽物が本物かも「手ざわり」でわかるようなことがあると思いますね。

(荻原) トカラ語文書のばあい、ドイツが一番多いんですけども、ガラスのプレートに入っていて、触れないんですよ(笑)。フランスのものは、二つ折りにされた紙に入っているの、触れるんですけども、小さくて、触ると欠けたりするので、あまり触らないでほしいと言われる。

(武内) 契丹文字の場合、中国遼寧省や内蒙古の石刻資料を用いることが多いです。拓本の写真をよく使うんですけども、どうしても文字が読めないことがありますから、現地での原石調査が必要で、博物館とかに行くことがありますね。

(荻原) 拓本はいつなされたものなんですか。最近ですか。

(武内) 最近です。原石の場所がわからなくなって、拓本だけが存在しているという資料もあります。

(金) 考古学は、土器とか金属器を観察しながら製作方法を比較して、技術変化の様相を見たりします。もし、何らかの歴史的な事件と変化のタイミングが一致していたら、技術革新が生じたきっかけになったのではないかと、そういうアプローチをしています。

(荻原) 原材料の場所はわかるんですか。

(金) 難しいですね。今ある産地が昔もあったかはわからないし、今ではわからない産地が昔あったかもしれない。例えば、新羅のお墓から金が出てくるんです。これまではどこから採れた金かわからなかった。ところが、砂金がとれるんじゃないかという研究があっ

たりもして。

(岩尾) 僕らも似ていて、写本の紙が問題になる。敦煌文書の中でも、チベット産や敦煌産の紙は感じが違います。で、チベットの紙でないのにチベット文字が書いてあったりすると、これ何なんだったってことになる。

(金) いわゆる「手ざわり」っていうのは、本当に紙の質とかを確認していく手法ということなのでしょうか。

(岩尾) そうですね。ただ、僕たちは手ざわりとか、厚さとか、漉き跡とか、その程度のレベル。最近は理科系の人が入ってきて、成分分析してるんですよ。僕らがやってるのは、本当に雑な読み方(笑)。考古学では、理科系の人分析とかもあるわけでしょ？

(金) もちろんです。例えば土器なら、どこの土かは顕微鏡でもわかるんです。でも、鉄や金になると、成分分析して、含まれる微量元素を根拠に産地を探したりします。

(岩尾) 具体的にはどうしてるんですか。掘り屋さんがいて、掘ってくる。で、分析屋さんが別について、それは考古学の分野なんですか。

(金) 分析屋さんが別にいるというか、文化財科学という分野があります。そこには文系の考古学出身者もいますけど、理系の科学的的方法論で最初からやってる人もいます。

(荻原) 壁画の分析が似てるでしょ？ テーマの分析以外にも、どういう顔料を使うかという。写本だと、ある資料を調べてる時に、人工的な切断箇所が

あって、カーボン14（放射性炭素年代測定）やってるんですよ。ああ、ちょっとなあっていうのはありますよ。

（岩尾）雑だよな、文書の扱って。欧州の某図書館だとある文書が出てこなくて、迷子になってたという、そういうアナログなことがある（笑）。

（金）考古学、モノ見つからない、しょっちゅうですよ。

（岩尾）しょっちゅう？

（金）はい（笑）。土器とかの破片がコンテナ何十箱分と出土するんですけど、その中で「報告されてるこの破片を出してくれ」と言われた時、探すのが大変で。

（岩尾）拓本じゃ、そんなことないか。

（武内）博物館所蔵の資料に、片面漢字、片面契丹文字の墓誌があるんですね。でも、漢字のほうが需要があるから、契丹面は壁にくっつけていて実見調査できないというものがあつたりするんですね。

（岩尾）野ざらしで、モノとしてボロボロになったものもあるんじゃないですか。

（武内）ありますね。昔とった拓本が何か使えるかどうかですね。

（岩尾）拓本がモノよりもいい場合があるというのはそうですね。チベットでも、ラサのど真ん中に唐蕃会盟碑という有名な碑文があって、18世紀に採られた拓本が一番古い。この拓本は、今は京大人文研にあります。で、今本物を見ても、ほとんど削れちゃってる。

（金）考古学は、特に鉄とかだと、どんどん錆びて崩壊していっちゃうんですね。戦前の白黒写真では鮮明なのに、現物はもう見るも無残ということがよくありますね。

（岩尾）それって、管理はどうしてるの？資料館ごとに違う？

（金）資料館ごとに全然違います。本当は温度や湿度を一定にして管理すべきですけど、すべての所でできているわけではないですね。

（荻原）私は、壁に書かれた当時の落書きを読むことがあるんだけど、現地でも100年ぐらい前にヨーロッパの探検隊が撮った写真が一番いいんですよ。今現場で見ると、もう壁が崩落してたり、あとから人が上書きしてたりして。

（岩尾）敦煌莫高窟でも修復のときにコンクリート入れたりして、落書きがなくなっちゃうことがある。

（荻原）だから、できるだけ早い時に写

真とるなり記録とるなりしていくべきなんだけど。

（岩尾）文献学ではデジタル化してからの公開が進んでいるけど。考古学はどう？

（金）デジタル化で公開なんて、ほとんどされてないですね。どうしても自分で見たいんですね、それぞれが。

（荻原）わかりますね。

（金）報告した人は、出せる情報を全部出したつもりでも、あとで研究する人は、見たいところが全然違うんです。でも、例えば史跡に指定されて、重要文化財とか国宝とかになると、自分で手にとって見るのは困難になります。そうすると、もとは学術調査で見つかったものであっても、学術的には利用が難しくなってる。

（荻原）骨董品化するのですよね。

（金）美術品なのか学術資料なのかっていう…。

（岩尾）そうなってくると、逆の問題が出てくる。偽物問題ね。契丹なんてまさにそうじゃない？

（武内）いやあ、ひどいですよ（笑）。

（一同）（笑）

（武内）契丹の墓は副葬品が非常に高価である場合が多いので。金に契丹文字を彫ったものがオークションで出ることもあったようです。

（岩尾）オークションで出る？

（武内）幸い、契丹の偽物は、見分けるのは簡単ですね。大体どこかのわかってる資料からコピーしてるとか、その程度の質なので。

（岩尾）それはどんどん、いたちごっこになるわけでしょ？向こうがもっと本物を知るようになって、研究者と結託していくと、より精巧な偽物が（笑）。

（荻原）結託する研究者っているの？

（岩尾）いると思うよ。中央アジア出土写本は、初期はつまらないのが出てきたけど、だんだんいいのが出てきたわけだから、あり得るんじゃないかな（笑）。

（武内）確かに、本物の新しい出土資料に対して、これは偽物に違いないとか、そういうことを言う人も出てきてますね。偽物がたくさん出回りすぎて。

（岩尾）偽物と言えば、考古学（笑）。

（金）いや、同じ偽物でも、雰囲気違いますね。例えば、刀だと、骨董品として流通させるなら、完全な形の方がいいんですよ。刃と柄の部分をつぎはぎして、それぞれは本物だけど、全体としては偽物みたいなやつがあつたりし

ます。

（岩尾）その偽物、本物クラスのものでしょ？研究対象にはなる？

（金）はい。ただ、出土時の情報がないので、学術資料としては、参考資料ぐらいに落ちちゃう。

（荻原）出土時の状態とか地層とかが不明だと、意味がないことが多いよね。

（金）はい。その情報があることが重要なんで。出土情報がわかったら最高なものになあってやつが美術品として流通してたり。

（岩尾）この問題はあつるよね。マーケットに出たやつが扱いが一番難しい。

（武内）契丹だと、新資料が最近たくさんあるんですけど、アンティークショップとか私立の博物館にあるのが報告されることも多いんですよ。

（岩尾）チベットは、出土品らしきものが出てくる、そういうば。

（荻原）木簡？

（岩尾）木簡じゃなくて、モノ。中国から金銀器とか織物とかが出てきて、スイスやアメリカの財団が買ってたりする。すると、写真は見たことがあるけど、直接には研究ができないんですよ。

（荻原）中国、今、開発激しいでしょ。開発の際に墓誌とか装飾品とかが出てきたり。

（武内）契丹は、もう90%の墓は盗掘済みだって言われているぐらい。

（金）これはひどい（笑）。

（武内）昔は、墓誌は捨て置かれることが多かったんですが、今は墓誌もお金になるので、持っていくようになってしまつて（笑）。

（岩尾）中国の機関が買つたりしないんですか。

（武内）今、買っているところがあるんですよ。だから、偽物を作る人も出てきちゃつてという感じですね。

（荻原）考古学だと、盗掘されたら、もう最後でしょ？（笑）。

（金）盗掘されたら、そうですね。文字の情報もないので、本当に本物かどうかがよくわかんなくて、使えない資料になってしまいます。

（岩尾）それは、カーボン14とかでわかんない？

（金）例えば、古墳時代の銅製品だと亜鉛が入っていないので、精巧でも亜鉛が出てきて偽物だとわかるということはありません。逆に、そういう精巧なやつらがいるから怖いんですね。

（荻原）文書もそうですね。オリジナル

をコピーして、書いてある内容は本物  
 だけど、文書自体は偽物という。

(岩尾) で、本物のほうは、もうなくなっ  
 ちゃうとかね。

(荻原) 出版された写真をそのままス  
 キャンして、汚い状態にして売り出す  
 ということがあるでしょ？

(岩尾) そう、本物の紙を使って書くとか  
 ね。

(荻原) 自分が出版した断片が、紙に何  
 回もコピーされて、ある博物館に渡っ  
 て、それから私のところに話が回って  
 きて「研究できるものであれば研究し  
 ても構わない」といわれて、見たら、  
 「あ、自分が読んだやつや」って(笑)。  
 こんな形で活用されるかと思いつなが  
 りながら。  
 (一同) (笑)

### 科学技術の進歩

(荻原) 科学技術の進歩といえば、イン  
 ターネット技術の発達によって、デジ  
 タル画像が簡単に見られるようになった。  
 わざわざ現地で見なくてもいい。  
 現地の図書館だと、一度に出してもら  
 える量が限られてるんで、比較がなか  
 なかできない。インターネットだと、  
 画像を落とせば比較可能なんで。それ  
 でもものすごくやりやすくなった。モノ  
 を見ないとわからない情報っていうの  
 があって。書いた人間が一緒かどうか  
 とか。

(岩尾) 国際敦煌プロジェクトというの  
 をイギリス中心にやってて、敦煌だけ  
 じゃなくて、中央アジアのもの全部を  
 対象にして、ヨーロッパでも中国のも  
 のでも、同じ基準でデジタル化してい  
 る。現物は見られないけど、画像で一  
 気に見られる。ダウンロードもでき  
 るんですよ。それをフォトショップなん  
 かで合成もできる。そうすると、これ  
 とこれ、違うところにあるけど…

(荻原) ひつつく？

(岩尾) ひつつくという、そういうのが、  
 できるんですね。

(金) まさに今の技術じゃないと、

(荻原) そう、ローマ字で翻字されただ

けではわからない情報がいろいろある。  
 読み間違いとかもわかる。昔の研究者  
 が必ずしも正しく読んでとは限らな  
 いので。

(岩尾) デジタル画像といえば、写真を  
 加工することができる。すると、普通  
 には見えないんだけど、文字が見える  
 ようにできる、そういうのもあります  
 ね。

(荻原) 拓本って公開されてるんですか、  
 インターネット上で。

(武内) 例えば京大の人文研も、所蔵し  
 てる契丹の拓本を画像で一部公開して  
 るんですけど、多くのものは自分で入  
 手する必要がありますね。図版とかで  
 最近は割と質のいい写真とかもありま  
 すけれど。

(岩尾) 拓本の本物と写真版とでは、ど  
 ちらが使いやすいですか。拓本はでか  
 いじゃないですか。

(武内) パソコンで処理する時は、デー  
 タ化されてるほうがいいです。ただ、  
 手元に印刷したものがないと、落ち着  
 かないですけど。

(金) アナログ化されたカードみたいな  
 やつが手元にあるのは重要ですよ。

(荻原) 考古学の資料だと、画像だけあ  
 っても、あまり意味ない。

(金) そうですね、結局、実際見なあか  
 んという話になりますね。

(岩尾) 公開の仕方に問題があるという  
 ことですか。

(金) 本当に360度、あらゆる角度か  
 ら観察したいですね。裏面に製作にか  
 かわる重要な痕跡があったりするん  
 です。専門じゃない人がやっても、なか  
 なかその裏面のこの部分の写真を報告  
 書に載せようという発想が出てこない  
 んです。

(岩尾) それは、けど、もともとの話に  
 なるけど、どうやって経験を積むん  
 ですか。

(金) たとえば鉄の出土品をX線にと  
 ったレントゲン写真を見ると、鏽だけ  
 の部分と、メタルが残ってるところが  
 わかります。そのX線写真と実物を見

比べていくうちに、だんだん見方も  
 わかってきたりします。

(岩尾) やっぱ経験則なんだ？

(金) そうですね。モノをたくさん見て、  
 自分で図面を書いたりとかをずっと続  
 けていく感じですね。

(岩尾) デジタル時代でも、最終的には  
 アナログな方法で経験を積む必要があ  
 るという。

(金) そうですね。びっくりするぐらい  
 アナログでやってますよ。

(岩尾) 手で描くんですか、こう。

(金) 手です。方眼紙の上にモノを設  
 置して、定規の類で測り込みながら、鉛  
 筆で図を描いていくんです。

(岩尾) じゃあ、絵が下手だったらダメ  
 じゃないですか。

(金) そう。めっちゃ苦勞してるん  
 ですよ、僕。

(一同) (笑)

(金) 実測といって、本当にリアルに写  
 實的にやるべきなんですけど、あまり  
 に下手で、先生にはずっと「おまえの  
 実測図面は印象派だな」と言われ。

(一同) (笑)

(金) 写実派で描いてるつもりなんです  
 けど。

(一同) (笑)

(金) 考古学でも拓本をとるんですけど、  
 契丹の研究では現地に直接行って自分  
 でとったりするんですか。

(武内) やりますね。モンゴルに自然の  
 まま置いてある資料を調査した際にし  
 たことがあります。拓本セット持って  
 行ってやったんですけど、慣れてない  
 んで、難しかったですね。

(金) 例えば瓦の研究をしている人が、  
 瓦の文様を拓本にとったり、鏡の研究  
 者が、鏡の裏面の文様をとったりもす  
 るんですけど、僕は拓本が一番苦手  
 ですね(笑)。

(岩尾) 一応練習はする？

(金) 実習で練習したりはするんです  
 けど、何回やっても紙に穴があくん  
 ですよ。

(岩尾) そういうメソッドの練習みたい  
 なのは、われわれじゃないよね。言語学も  
 歴史学も。

(荻原) ないね。まともな先生につけ  
 れば運がよくて、いろんなこと教えて  
 もらえるけど、実際はそうじゃないほう  
 が多いんで。

(金) 先生からすれば、これはこうや  
 ってるんだ、自分で盗めぐらいの感じ  
 のがあるんですか。



(岩尾) そう。だけど、メソッドは必要。拓本をとる技術ぐらいは、どこかで教えてほしいな (笑)。モノを扱うときのこの基本的なメソッドみたいなやつを、どこかで。

### 研究の現代的意義

(岩尾) いろいろ研究するとして、どのように研究テーマを決めていくかは、結局は現在のわれわれの関心と関係すると思うんだけど、どこに「出口」を探していくかは、どうですか。細かいことをやって、この先どうすんだ、これ、みたいな (笑)。ほかの分野の人と協力するとか、こういうところで喋る時に、共通の問題意識のようなものを探さなければいけないですか。みんな、どうしてるの? 荻原さんとは昔から知り合いなんだけど、でも、どうしてトカラなの? (荻原) いや、もともと私は漢訳仏典がやりたくて。

(岩尾) 全然違うやん。

(荻原) そう。中国語が専門の学部で、漢訳仏典の言語学的な研究がしたいと。そう考えてるうちに、漢訳仏典を研究するには、原典を知らないといけない。でもサンスクリットの、例えば玄奘 (三蔵法師) が持ってきた原典はないでしょ。

(岩尾) ガンダーラとかには行かなかったの?

(荻原) その時はちょうどガンダーラ語の新資料が出てくる直前だったから、そこには行けなかった。調べていくと、一番わかってないのがトカラ語だったので、将来性があるとか何も考えずに興味をもって。面白いなと思ってやってるうちに、ある程度の段階になると、なぜやってる人間が少ないかわかる瞬間がくる。

(一同) (笑)

(金) 考古学だと、博物館に行って埴輪が面白い顔をしてるから埴輪やってみようかな、みたいな。それでやってるうちに問題意識がもともと先にあったみたいになってくるんですね。僕の場合は、ドラゴンクエストで出てきた「はがねのつるぎ」を研究してみようっていう感じでした。

(一同) (笑)

(岩尾) 僕はもともとインドのことをやりたかったんだけど、だんだんチベットにいて、敦煌学にいて、いつのまにかチベットからアジアをみるようになった。

(金) やってるうちに、こっちに派生したこの問題も面白いぞ、みたいになってくるんですね。

(岩尾) そうそう、まさにそれ。武内さんは決め打ち?

(武内) いや、僕は昔から不思議なものが全体的に好きなんですよね。それで大学にきて、京大言語で文献言語学というのがあった。そうこうしているうちにこうなっちゃったという感じですけど。

(岩尾) 読めないものといえば西夏文字<sup>1</sup>、契丹文字、女真文字<sup>2</sup>もあるし、もっと西のほういけば他にもあるじゃないですか。何で契丹文字にしたんですか。

(武内) 契丹が一番読めないからですよ (笑)。

(岩尾) 女真もそこそこ読めないんじゃないですか。

(武内) 女真は辞書が出てますね。でも、女真は契丹よりも資料の数の面ではきついです。

(岩尾) じゃあ、契丹のほうはまだ先があるみたいな。

(武内) そこまで考えてなかったですけどね。

(一同) (笑)

(武内) 作業していて、ある文字について発音や意味がわかるとか、それだけで楽しいんですけど、さらに背後の言語に関する部分が何かわかったりすることがあるんですね。そういう時に、その文法現象について調べて論文を書いたりとか。

(岩尾) じゃあ、「出口」というか、現代的な意味とかはそこまで考えていない?

(武内) 技術の話にいつちやいますけど、今テキストを全部電子化して検索できるようにしようとしています。これができると、研究するには非常に便利になりますし。ただ、文字自体がまだ整理されていないし、表意文字である契丹大字 (きったんだいじ) だと 1000 文字以上文字があるので、電子化するのも大変ではあるんですけどね。どうですか、電子化して利用するというのは? チベットもあるんですね。

(岩尾) チベットは今、日本が中心になってやってますよ。

(金) あると飛躍的に違うものですか。

(岩尾) 全然違いますね、データベースは。まさに言語学的手法で、KWIC (クウィック: keyword in context の略) というやつですよ。単語を検索する

と文脈つきで結果がでてくる。たとえば、古いチベット語の場合、中世のチベット語と単語は同じだけど意味が上書きされてるというのが結構あって。そういうものが、検索して文脈からわかるようになる。

(金) 今まさにデータベースがどんどん構築されているということは、そこからいろいろな分野に一気に展開していくという、まさにそのタイミングなんですかね。

(岩尾) 多分そうだと思います。特にチベットに対してはそうですね。トカラも結構やってるんだよね?

(荻原) やってますね。ただ、前提として、ちゃんと写本が読めるというのが必要だよな。

(一同) (笑)

(金) 一朝一夕にはできないということですよな。

(荻原) あと、データベースに頼りすぎしてしまうのもいけない。検索結果の前後しか見ないのはダメで、文献全体として把握しないとイケない。

(岩尾) 実は中国語学もそういうところがあって。たとえば、特に伝統的なものを読むときには、儒教の経典を下敷きにしてあるテキストがある。経典をちゃんと読んでたらすぐ出典がわかるんだけど、今は全部データベース化されてるから、字句がすこしかえてあると、検索してもわからなくなる。

(荻原) バランスですよな。経験も必要だし。使えるツールがあればそれも使うべきだし。

(金) アナログな部分というのが前提になって初めてデジタルをフル活用できるということになるんですね。

(荻原) 経験が重要だと思う、自分は。

(岩尾) それをどうやって積んでいくかが問題。特に、今はどんどん論文を出さないといけない時代じゃないですか。昔みたいに 3 年に 1 回論文書いたらいいというレベルじゃないから。どうやってバランスをとるかですよな。経験を積んでないと論文を書けないんだから。(荻原) それはほら、ある文献言語の研究をするために必要な知識を蓄えてからやるか、研究しながら積んでいくかというのと似てるところがあるでしょ?

(岩尾) その辺のバランスをどうしたらいいんやろう。僕は何とか生き残って、これからダメになるかもしれんけど (笑)、とりあえずここまで来た。この次の世代からはどうするのがよいの

かなとは思う。

(荻原) 次の世代ね。そもそも次の世代を見つけないと。

(一同) (笑)

(荻原) それこそ、僕らの学問が現代的な意味でどういう価値を持ってるかという問題があるから。

(金) 社会の雰囲気も変わってきてますもんね。そんな中であえてここに飛び込んでくる人をいかにつかまえるかという話ですよ。

(荻原) 考古学、どうですか。イメージだと、どちらかというとな配の方に人気がある。

(一同) (笑)

(金) そうなんです。これ、何十年かして人気を支えていた年配の方々がお亡くなりになったら、考古学は大打撃をこうむるのではないかと。例えば発掘調査をして、調査の現地説明会というのをやるんですけど、それで呼んだら、年配の方ばかりで若者はほとんど来ないですね。それこそ何かポケモンGOみたいな感じの、

(一同) (笑)

(金) あそこに行けば必ず手に入る土器をみんなで取りに行こうぜみたいな、そういうのを誰か作ってくれないかなと思ってんですけど。

(荻原) トカラ語は、印欧語比較言語学の一つの部門になっていて、最近英語の辞書が出版された事と、研究の全体像が把握しやすくなってきた事もあって、増えてますよね。

(岩尾) 増えてるんだ (笑)。

(荻原) ここ 15 年ぐらいで若い人が増えてますね。ただ、トカラ語を利用して印欧語比較言語学をやりたいということなんで、文献言語学的にはどうか。論文書くまでに一定期間修業が要るじゃないですか、文献研究って。それに耐えられるかということですよ。多分チベットも同じだと思うんですけど、モノを読んで分析できるまでになるには素養が要るでしょ。契丹なんか特に。

(武内) 契丹は今後、学術的にはですけど、盛り上がっていきそうな流れではありますけどね。

(荻原) 資料が増えているからですか。

(武内) 資料もありますし、これまで中国の研究者が一番多かったのですが、最近は欧米の研究者も入ってきたりして。歴史学の人、以前は漢文資料だけであったのが、契丹文字の墓誌か



ら歴史を読むというのを始めてる人が出てきているので。

(荻原) 新しい段階がきつつあるという状況ですね。

(武内) そういう意味では盛り上がってきそうではあるんですけどね、学術的に。ただ、一般的に社会でどうかというところ。

(一同) (笑)

(司会) 『シュトヘル』<sup>3</sup>の中にも契丹文字が出てきませんでしたか？

(荻原) あれ、西夏じゃなかったでしたっけ？

(司会) 基本的に西夏ですけど、ちょっと出てませんでしたっけ？

(荻原) 私、読んでない (笑)。

(一同) (笑)

### 日本とのかかわり

(荻原) 日本とのかかわりで言うと、どうですか。日本国内に例えば拓本がどれだけあるとか。

(武内) 戦前のものばかりで、少ないですね。ただ、もう原石がなくて拓本しか伝わってないものの一つが日本にあるという噂があります。

(荻原) 日本にあるチベット語文書はどうですか。

(岩尾) 古代に限って言うと少ないですし、いわゆる出土文書に限定されますよね。日本とのかかわりというのは難しいんだよね、チベットは。

(武内) でもチベットは、チベットファンが結構いらっしゃるじゃないですか。だから、イメージとしては、いろいろ理解が得られそうなんですけど。

(岩尾) 確かに一定のチベットファンというのがいる。ただ、チベットといってもヒマラヤが好きという人たちと、中国との関係で政治的な興味で入ってくる人たち、そしてチベット仏教に興味がある人たち。みんな毛色が違う。でも僕がやってるチベットは、仏教文

化が根付く前の話だから、ちょっと違うわけですよ。だから、講演なんかで話しても「全然イメージが違った」とか「そういうことじゃなくてチベット仏教はどうですか」みたいな。

(一同) (笑)

(岩尾) トカラはどうですか。

(荻原) 難しいですね。トカラ語の内、トカラ語 B は、古代クチャ国の言語だったんだけど、古代クチャ国の出身者で一番有名なのがクマーラジーバ<sup>4</sup>という (笑)。でも、クマーラジーバはトカラ語の資料には出てこないんで。

(岩尾) 特に中央アジアは、その後トルコ化・イスラム化したからね。残っていないからね。

(荻原) 消滅してしまった文化って、興味を抱きにくいというのがあって。契丹もそうじゃないですか。

(武内) そうですね。耶律阿保機<sup>5</sup>という名前を覚えていればいいのかというところ。

(一同) (笑)

(荻原) われわれの分野だと、現代日本とのつながりといわれても、説得力を持つかたちでは表明しにくいというのが実際だと思う。

(岩尾) 僕は、たとえ今はなくなったものでも、同じような人間が生きていたということを講演とかで強調するんですよ。そうすると共感してもらえる。ある歴史学者の言によると、歴史で何が大事かというところ、共感だということですね。600 万年人類の歴史があって、文字資料が残っている歴史はもっと短いんですけど、その中でも人間の営みというのはずっと一緒だったということ共感する。だけど、違うところもある。何で違うのかというところを知るのが歴史だという話。

(金) 歴史の共感をピンポイントで提供していくことが現代とのつながりと思うんですよ。例えば、埴輪とか銅鐸のゆるキャラがいるというのも一つの

形かと思えますし。ただ、そこを逆に追及していくと、例えばナショナリズムとかに歪められてしまうので、気をつけていかないといけないかなと。

(岩尾) 過去をやるうえで、それが一番大事ですよ。

(金) 現地で歴史的な何かを明らかにしたときに、現地の人たちがそこに抱く思いと、いわゆる客観的な歴史とが、どう結びついて、どう変容するのかというのはややこしい問題だなと思えますね。

(岩尾) 確かにそれはそうですね。現在からは未来と過去が見えないから、どうしてもその時代の投影が出る。例えばチベット人が考える過去というのは完全に仏教世界なんですよ。ソツェン・ガンポ<sup>6</sup>という偉い王様は観音様の生まれ変わりとしてチベット人は考える。だけど、歴史家から見ると全然違うんですよ。ただ、科学としての

チベット史と、チベット人が考える仏教的なチベット史が並行していて、うまく融合されてたりする。人類が始まって600万年、氷河期が終わって何万年、このぐらいに仏教国のチベットができてという感じでつながってるんですよ。違和感なく。さっき共感という話をしたけど、このチベット人の歴史観に共感しすぎると難しくなる。

(金) そうですね、共感からさらにいきすぎてしまうと危ない。歴史的な部分にかかわってる学問の場合、とにかく何とか人の役に立たなきゃとというのは全然違う次元の悩みがあるような気がします。

(岩尾) バランスが大切だね。言語学も実はそういうところありますよね？

(武内) うーん (笑)。

(岩尾) だって、印欧語のインド・ゲルマンとか。

(武内) あればナショナリズムに利用さ

れた例ですよ。

(岩尾) 科学的に見えて、逆に使いやすいみたいな。今でもあるじゃん、日本人とチベット人、日本人と何々人。

(荻原) タミル人とか。

(一同) (笑)

(岩尾) あれは似非言語学でしょ。そういうので使いやすいといえれば使いやすいよね。

(金) 何とでも利用されますね、本当に。(岩尾) 契丹だってあり得るよね？

(武内) 一部の研究者が今のダグール人(中国・内モンゴル自治区に居住するモンゴル系民族)が契丹の後裔だと言うのですが、そのことが観光などに利用されているという話を聞いたことがありますね。

(司会) 研究は地味でも、お話は面白くて安心しました。そろそろ時間になりましたので、このあたりで。ありがとうございました。

<sup>1</sup> 西夏文字：中国西北部に11世紀から13世紀にかけて栄えた西夏王国の文字。京都大学文学部言語学の西田龍雄教授(1928-2012)により解読された。

<sup>2</sup> 女真文字：中国北部で12世紀から15世紀にかけて女真人によって使用された文字。

<sup>3</sup> 「シュトヘル」：西夏文字を主題にした漫画。作者は伊藤悠。第4巻14頁に、契丹文字と女真文字も出ている。ただし、字形は間違っている。

<sup>4</sup> クマラージーバ：Kumārājīva(鳩摩羅什；344-413)。西域出身でインド人を父とする中国六朝時代の仏典漢訳者。

<sup>5</sup> 耶律阿保機(やりつあほき)：10世紀に中国北部で遼を建国した皇帝。

<sup>6</sup> ソツェン・ガンポ：6世紀から7世紀にかけて君臨し、初めてチベットを統一するとともに、仏教を導入した王。

## 海外渡航記

# ロンドン大学での研究生活

米田 英嗣

平成27年10月16日～平成28年10月14日まで、京都大学若手人材海外派遣事業ジョン万プログラムのご支援を受けまして、ロンドン大学ゴールドスミス校に研究滞在をしました。ここでは、Elisabeth Hill教授と共同して自閉スペクトラム症傾向を持つ発達性協調運動障害の成人を対象とした時間知覚に及ぼす共感の影響についての研究を行いました。発達性協調運動障害とは、日常生活における協調運動が、本人の年齢や知能に応じて期待されるものよりも不正確であったり、困難であるという神経発達障害(American Psychiatric Association, 2013)で、日本ではあまりなじみがありませんが、自閉スペクトラム症よりも発生数が多いといわれています。

Hill先生のラボでは、実験室で得られた知見を、教育現場に還元する方法をとっていました。たとえば、自閉スペクトラム症の児童をリクルートする際に、現地の小学校で募集し、結果を教員にフィード

バックするという体制が確立されていました。研究室の運営方法として、Hill先生は、副学長で大変忙しい立場にありながら、毎月のミーティングを重視していました。多くの研究費を獲得しており、ポストドク研究員、大学院生に対して、適切な研究テーマを与えていました。また、教員同士の共同研究もされており、チームとして研究課題に取り組む姿勢は非常に勉強になり、自分も今度ラボを持つ上での参考にしようと考えました。教育方針・人材育成方法として、神経発達障害の方々を対象にした研究を行うラボであることから、基礎的な研究が、神経発達障害を持つ児童、成人に対してどんな貢献ができるかを指導していました。研究能力だけでなく、人格的な教育もめざしている素晴らしいラボでした。実際、ラボメンバーは皆親切で、人柄も素晴らしかったです。幸いなことに、研究費が採択されましたので、Hill先生とは今後共同研究を続けていきたいと思っております。

ロンドンでは、研究だけではなく、子どもの保育園や小学校などを通じまして、地域の人との交流も楽しめました。かけがえのない貴重な機会を賜りました、白眉プロジェクトおよびジョン万プログラム、関係の皆様、心よりお礼を申し上げます。

(こめだ ひでつぐ)



手先の器用さを測る課題を行う実験室の風景